

町では、平成16年度から3か年計画で、「食育」について、文部科学省や県教育委員会の協力のもと、さまざまな研究を行ってきました。
この研究によって子どもたち、そして子どもたちを取り巻く環境はどのように変化したのかを探ります。

研究の経緯

町では、平成7年度から子どもたちが肥満、運動不足などにならないよう、「小児生活習慣病予防検診事業」を展開する一方、平成12・13年度には県教育委員会より委嘱を受け、「小中連携教育」の実践、さらに平成15年度には文部科学省より「安全かつ安心な学校給食推進事業」の委嘱



を受け、健全な子どもたちの発育に関してさまざまな研究を進めてきました。事業を実践していく中で、朝食欠食児童の増加や食生活の乱れなど、現在の子どもの実態が明らかになっていきました。その中、平成16年度から3年間、文部科学省より、「学校を中心とした食育推進事業」の委嘱を受けることとなり、実践中心校として、小



特集 食育

“Shokuiku”で



子どもが変わる
家庭が変わる地域が変わる

地域ネットワークの必要性

ワーキンググループの 取組み

学校給食は生きた教材、

WG … 学校給食センター
を中心に

このグループでは、豊かな自然の残る伊奈町で栽培される農作物に注目。地域との連携を重点項目とし、JAや関連東農政局などの各関係機関の協力のもと、身近な農作物の給食食材への提供、生産者との交流給食会などを実施し、地産地消に対する理解を深めました。



知・徳・体を支える食育、

WG … 学校を中心に

このグループでは、学校の授業の中で食育を理解することに重点をおきました。例として、米作りやジャガイモ掘り、搾乳などの実体験を通じた授業展開、また、総合的な学

室小学校と伊奈中学校を指定し、また研究協力機関として学校給食センターを指定し、各種食育関連事業を推進してきました。

研究の構想

食育を通して、豊かな心をはぐくみ、地域とともに生きる子どもの育成

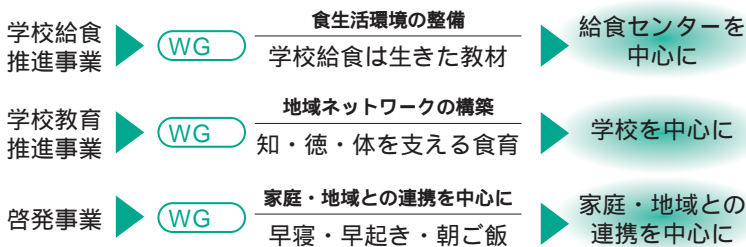
研究では、学校給食推進事業(WG)、学校教育推進事業(WG)、啓発事業(WG)の3つの重点事業から、研究テーマに基づいた、各種事業を展開していきました。
(別図参照)

WG…ワーキンググループ

学校を中心とした食育推進事業

重点事業

文部科学省委嘱





渡辺 俊行
小室小学校校長

文部科学省から委嘱を受け、平成16年度から「学校を中心とした食育推進事業」がスタートしましたが、実際に事業を進めていくなかで、どのような印象を受けましたか？

改めて、食育が今日的な重要課題であり、食育への関心の高さを実感として感じ取ることができました。

また、学校を取り巻く地域には、食の生産・流通・調理・販売に関わる方々がおり、うまく学校での食育推進事業でご活躍いただくことができたことは、今後の食育推進事業を展開するうえで、素晴らしいネットワークが構築できたと思っています。

国で策定した食育推進基本計画(私も関わらせていただきました)では、ネットワークや連携がキーワードとなっており、家庭・学校・地域が連携を組み、食育を展開することがうたわれていますが、食育の総合的な展開の一つの食育推進の伊奈町モデルを提供できたと感じています。

小室小学校では、稲作体験やわくわくモーニングスクールなどのさまざまな体験をされましたが、子どもたちの食に関する意識はどのように変わったと思われますか？

各種体験や経験を通して食べることは「いのち」をいただいていること、「いのち」の循環について感じ取ったこと、また、朝ごはんを食べることが大切であると感じ取ってくれるようになったと思います。

しかし、意識化は図られても、実際の食行動・食生活となると難しい面が感じられます。

今回の食育事業を通じ、一番重要だと感じた点は何でしょうか？

食は、本来、家庭の私的でプライベートなことであり、学校教育で扱うこと自体が問題であると感じています。

食育は、何を食べなさい、これを食べなければいけないということではなく、食という窓からもう一度、各家庭の食の在り方を見直すと共に食糧自給率など、よりグローバルな視点で食を見てほしいということです。

子どもたちの食べる力は、そのまま生きる力であり、学ぶ力、運動する力、人を思いやる力、生気の源でもあります。その力をもう一度、食育を通して学校・家庭・地域が一緒になって運動として身に付けていきたいと感じています。

子どもたちに対して、食育事業を通じてのメッセージをお願いします。

2つの点について考えてほしいと思います。食べ物を目の前にしたとき、なぜ、自分たちは食べるのか、食べなかつたらどうなるのか、どこからこの食べ物は来たのか、どんな思いで、この食べ物を調理し、食材を作り、食材を運んできたのか、考えてほしいと思います。

また、食に関して人や動植物の「いのち」に感謝しているか、食べ残しをしていないか、栄養的にバランスよく食べているか、おいしく味わって食べているか、併せて、たくさん運動しているかなどについて考えながら、これまでの自分や家族の食生活や生活リズムを見直していただきたいと思います。

習の時間では、食の重要性を子どもたち自ら学べるよう地域ネットワークを構築することができました。
〜早寝・早起き・朝ご飯〜
WG … 家庭・地域との連携を中心に
このグループでは、小中連携教育の特質を生かし、学校・家庭・地域が一体となった食生活の工夫・改善に着



目。教職員だけではなく、PTAも参加しての講演会や各種料理教室等を実施しました。
各グループの事業に基づいた成果を実践校だけが享受されるのではなく、伊奈町全体の取組みとして、共通理解を図るために、全教職員を対象に食育講演会を開催しました。
共通理解の徹底



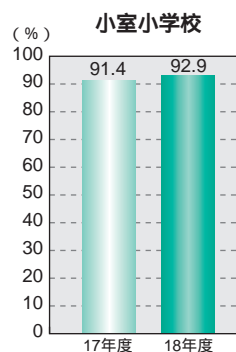
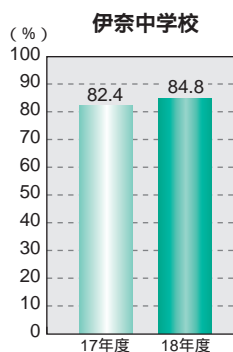
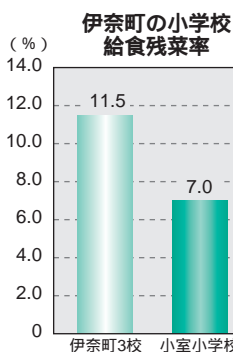
食育事業の成果

〜埼玉県

食の安全大賞を受賞

学校・家庭・地域が連携し、「食」に関するさまざまな事業を展開した結果、児童生徒がおいしそうに野菜や給食を食べる姿に感動した生産者の方々の営農意欲の再興が見られました。また、家庭では食卓での食に関する会話が増え、朝食の欠食率も減少するといった効果が見られ、学校では給食の残菜率が大幅に減るなど、食に対する理解が深まり、豊かな心の醸成につなげることができたようです。
(別添グラフ参照)

また、地域ぐるみで食育の推進を積極的に行った成果が認められ、平成17年には「埼玉県食の安全大賞」を受賞しました。



毎日朝食を食べていますか
(毎日食べている児童生徒の割合)

今後の課題

今回、町が食育事業に熱心に取り組むことができた背景には、冒頭で述べた生活習慣病予防事業や義務教育中、連続してさまざまな教育活動を展開できる小中連携事業といった土台があります。

また、地元の生産者の方々や各関係機関の協力、そして何より家庭の理解があつてこそ成り立った事業と思われます。食育の学習は、生活習慣の改善や道徳教育、環境教育などさまざまな教育に通ずるもので、今後も学校・家庭・地域という地域ネットワークをより充実させていく必要があります。身近な環境から食を考える。子どもたちの健全な発達のためにも、ぜひご家庭でも考えてみてはいかがでしょうか。